

はくさん



第1卷 第4号

も く じ

越の白山—「三州奇談」にみる白山関係の伝承・1—

.....千葉 徳爾	1
白山の植生 4 蛇谷の高茎草原—種類組成から.....菅沼 孝之	4
山 日 記.....	5
聞き書き 中宮温泉のむかし.....松山 利夫	6
石川県の自然公園・1.....柳田 亨	8
図書・資料紹介.....	9
た よ り.....	9
表紙解説・白山のクロユリ.....	10

普及誌“はくさん”の編集方針について

“はくさん”は、白山地域の自然および自然保護の正しい理解と普及のため、ひろく一般のかたがたに読んでいただくことを目的とした普及雑誌です。

いろいろな内容のものが掲載できるようにしたいと思いますので、各方面のかたに原稿をお願いするとともに、自然や自然保護に関心をおもちの方の投稿も歓迎いたします。

なお、普及雑誌ですので、行政的な問題や専門的な学術論文などは、おことわり申しあげることがあるかと思えます。

(研究普及課)

越の白山—「三州奇談」にみる白山関係の伝承— 1

千葉 徳 爾

江戸時代の中ごろ、1760年代に書かれた「三州奇談」という書物があります。その題のように、加賀・能登・越中の3つの国の、名所旧跡にまつわる伝説奇聞を、漢文和文のまじった美文調で記したもので、中にはつまらない話も多いのですが、他郷の者がみても興味あるもの、あるいは民俗学からみて価値の高いものなど、捨てがたい味もっています。その中には、白山に関する話題もいくつか見出すことができますので、それらを御紹介するとともに、私なりの解説も試みようかと思う次第です。

ところで、「三州奇談」には5巻、98項目の話がのっていますが(統編を省く)、その中に白山地域についての話は4項目しかありません。しかし、この書物には旧前田藩領内のことしかのっていませんから、尾口村・白峰村方面ははぶかれております。これはやむを得ぬことでしょう。文章は和漢混淆のわかりにくいものですから、ここでは現代文で大意を紹介するにとどめます。

第1話は「白山の靈妙」と題され、白山は越の国第一の名山だから、この話を最初にするのだと、著者はことわっております。

『そもそも白山は、越の国の鎮めとなる靈山で、花びらのような形の雪の峯が、四方から仰がれます。峯嶺は15～6里四方にひろがり、最高峯は大汝と呼ばれます。また、その半腹おなんじを隠汝といい、遠くからみれば壁のよう

に突立つけわしい山で、すぐれて美しい姿を見せています。山中に住む善心という坊さんの話をきくと、この隠汝は近づいて大汝から眺めると、その名のようにかくれてしまって、どの山がそれかわからない山なのだということです。この人はもう十年ばかりも山中に住んでいて、大汝にも何度か登りましたが、山麓で望んだ光景と大汝頂上から眺めるのとは、山のようすがまったく異なってしまおうです。

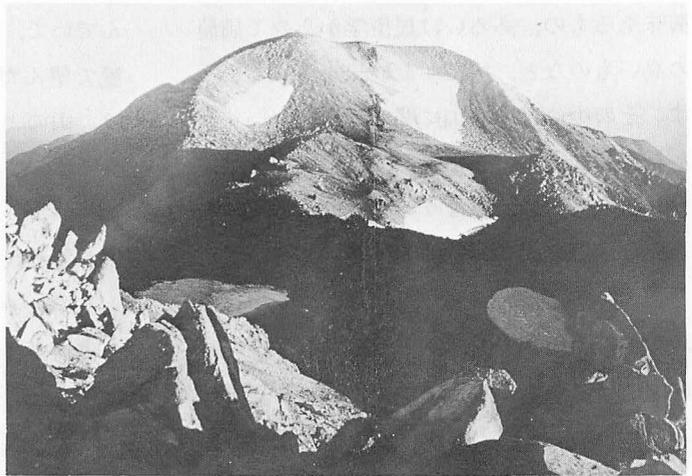
このような不可思議の現象は、白山という山が神か妖怪のすみかであることの証明といえるでしょう。私が不思議な話題を集めたこの書物のはじめに、まず白山をとりあげたのはこのためです。なお、この善心という坊さんは大聖寺の富商の一族ですが、破産して髪をそり白山の室堂に住んでいた人です。この人の話によると、別山の神社の社殿の入口では、いつも山風が吹きすさむそうですし、山中で2尺ばかりの真赤な火のような蛇を見たこともあるそうです。それから山中には鶉うすに似た鳥(雷鳥のこと)がいて、その羽毛は人声をきくとぬけ落ちるので、それを拾った人はお守として大切にするとのことです。』

読者が御承知のように、今日の知識では白山の最高峯は大汝ではなく、その南の18m高い御前峰です。しかし、昔の人は遠くから眺めて形のととのった大汝峯を、白山の頂上とみなしたわけでした。この点も古人のもの



◁ 大汝峰 (2,684 m) と
御前峰 (2,702 m) の遠望

御前峰よりみた大汝峰 ▷



大汝から見た四塚山 (左)
七倉山 (右)



写真について

ここに掲載の写真は、故伊藤仁夫氏の遺作写真集「白山の四季」に収められたものです。

御遺族と福井新聞社・藤田圭一氏の御厚意により掲載することができました。

なお、「白山の四季」については本誌創刊号で紹介させていただきました。

考え方を知る上で興味のあるところですが、この話の焦点である隠汝というのは、いまのどの山なのでしょう。

白山は加賀・越前・飛騨にまたがっていますので、登山道もそれぞれの口があるわけですが、ここでは加賀の話題として出てくるのですから、加賀から眺めて大汝の山腹に当たることだとみていいわけです。加賀からの登山道は、この時代には尾添から目付谷を溯って立屋谷から尾根にとりつくか、または被谷を通して檜神の尾根に上るかで、両者はオセンスのマップの頂、968 mの突端で合します。隠汝という山は、ここから山頂までの間に見ることができなくてはなりません。これといま一つ、文中の言葉からうかがわれる特色は、この峯は低いけれどもけわしい岩壁があるということです。この2つからみると、大汝の北西七倉山から南西にのびる2280 mの尾根以外にはみあたりません。この山は賽の河源から瓶割坂を過ぎるころまでは、よく眺められますけれども、四塚山を登りはじめると山にかくれて見えなくなり、再び現れたときは尾根の真上から見下すので、姿がまったく変わってしまいます。反対側は浅い谷ですから、どうみても北から眺めた姿はまったく思い浮ばぬわけでしょう。この山をのぞいては、文中に記されたような場所は、地図の上に求められないように思います。

くわしい地図や写真ができた今日では、何ともたわいのない話のようですが、こんな話を昔から伝えてきた人たちの心持を考えると、私などには大そう興味をそそられるの

です。それは、ここに出てくる大汝と、それに対して低くて所在を求められない隠汝という山の、名前がもつ意味が、心をひかれるものだからです。大ナンジ・小ナンジは、三河・信濃の山村の狩人たちの語るところによると、昔の猟師の名でした。その一方は山の女神が困っているところを助けた賞として山の幸をめぐまれ、他の1人はそれを見すごして何もしなかった罰として、狩のえものがなくなり、不幸な生活を送ったということです。それで古風な狩人たちは、西は九州から北は会津の山中まで、大ナンジ・小ナンジの名はなくとも、山の神を救った方の猟師を狩の元祖として尊敬し、みずからその末流と名のるのを常としているのです。大ナンジがその幸をめぐまれた狩人の名だというのは、主として栃木・新潟方面の山間で、反対に小ナンジをそれとするのは西日本に多いようです。白山の大汝がその高いのをたたえての名とすると、姿のわからぬ小汝は罰をうけた方の猟師とみられ、したがって白山山麓に語り伝えられたのは、北方系に属すると申せましょう。柳田国男先生はこの物語は2つの山の優劣を説くのがもとで、山岳信仰から生れたものであり、古く常陸風土記にみえる富士と筑波との対比の神話も、同じ系統に属すると述べておられます。今では住民が忘れてしまった神話の名残りが、1つの山の名とそれについての信仰からもうかがわれるわけです。なお、大汝峰という山名は木曾御岳や立山にもあって、諸国の名山に共通しているようです。

〈愛知大学文学部〉

蛇谷の高茎草原—種類組成から

—白山の植生4—

菅 沼 孝 之

白山一帯は、わが国における有数の多雪地帯で、この地域では積雪による物理的な条件で森林が育たずに草原が発達するところがある。本誌の創刊号で述べた高茎草原もこの草原の一種で、かなり広い範囲にわたって分布している。白山自然保護センターがある蛇谷一帯も例外ではなく、急峻なV字形溪谷の兩岸に高茎草原が発達している（写真参照）。



山腹の斜面に発達した広大な山地帯の高茎草原

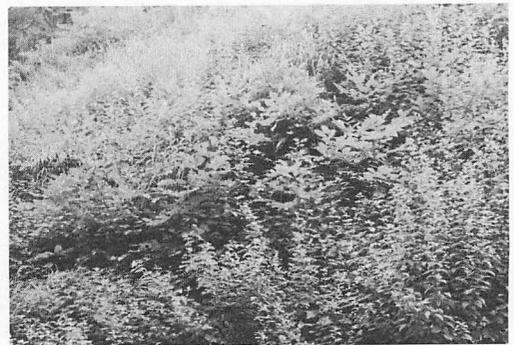
蛇谷地域は、一応、ブナ帯（山地帯）に入り高茎草原も、創刊号で述べた亜高山帯、高山帯のものと構成する種類がちがひ、草原に咲く花の色彩も亜高山・高山帯のものに比べるとさみしい。しかし、蛇谷に分布する高茎草原は、この地帯一帯に住むニホンザルの生活と密接な関係がある（「白山の自然」の河合らおよび林の論文を参照されたい）。すなわち、ニホンザルの良い餌場となっているのである。

この地域の航空写真で調べると、高茎草原は海拔600~700 m（下限）から同じく1,700 m附近（上限）にまで分布し、あるものは広く、あるものは狭いことを確認できる。しかし、すべての草原を実施調査することはむずかしいので可能な限り調査した結果、つぎの

ようなことがわかった。

この地帯の高茎草原は、1.5 mから2 mに達する上層と、地表近くの下層の2層に分けることができる。上層を構成する植物はアカソ・クロバナヒキオコシ・ヤマヨモギ・ハクサンアザミ・ススキ・カリヤス・ミヤマイラクサ・ムカゴイラクサなどで、亜高山帯や高山帯の高茎草原と同じように、一種が群落のほとんどを支配しているような場合は少なく、2ないし3種がほとんど同じ程度で生育していることが多い（写真参照）。群落の内部はうっ閉された感じが強いが、それでも、オオアキギリ・ウワバミソウ・クジャクシダ・フキなどが生育している。

この草原は群落学的には「ヤマヨモギ・クロバナヒキオコシ群集」と呼ばれ、この名称は山地帯の多雪地に発達する高茎草原群落に与えられている。蛇谷ではこの群集に、シンウド亜群集と典型亜群集の2つの下位単位を認めることができた。シンウド亜群集はシンウドとホウチャクソウを区分種としてもっているが、典型亜群集はそれらが出現しない。



山地帯の高茎草原

ヤマヨモギ・アカソ・ウド・ススキが主構成種である立地

また、シシウド亜群集はやや陰地で湿性の安定した立地に発達するのに対して、典型亜群集は向陽の谷ぞいの斜面の下部や河原、洲などで、礫質土壌で排水はよいが不安定な立地に見られる。全調査地の出現種数は165種で、マント・ソデ群落の構成種をかなりふくんでいる。木本植物は少なく、7%未満（つる植物を除く）であった。

次号でニホンザルの餌場としての高茎草原について述べることにしたい。なお、この研究の詳細については、芳賀真理子と共著で発表の準備をすすめている。

〈奈良女子大学理学部〉



蛇谷附近の高茎草原(ヤマヨモギークロバナヒキオコシ群集典型亜群集)の断面模式図

山日記

白山麓は二年連続の暖冬のあとに、この冬は大雪になりそうである。

白山麓に住む人々は、その多くが土木建設業に従事しているが、冬季は豪雪のためほとんどの工事がストップし、失業状態になる人が続出する。中宮、尾添、桑島、白峰などで、冬は猟に出る人の多いのもそうした理由によると思われるが、昔から狩猟がさかんで、猟銃を肩にした屈強の青壮年に出会う事もこの時期になるとしばしばである。野うさぎ、やまどりを獲得という話であるが、ライフルを持っている人達は、クマ狩りが目的のようである。

近頃は、にわか石油危機という事から日常生活の根底がゆさぶられるような異常事態を迎えているが、私達の身のまわりに起っている環境問題にしても、慣れ親しんできた文明というものが空おそろしいように思えてくるのです。鉱工業の水銀・カドミウムの汚染、増産・省力を支えた農業と化学肥料のもたらした土壌汚染と地力の低下、自由な行動を約束されていた自動車の洪水と都市の大気汚染、これら科学の工業化がもたらしてくれた恩恵が今や逆説的な結果を生み、生命に係る問題となってきている。

私どもが、白山の清掃、登山案内にあたっている時、登山者から白山をこのまま残してほしいという声を何度もきいている。公害列島というようななんともやりきれない名を付けられた日本。汚された国土というイメージの中であって、豊かな原生林、広大なお花畑、さらにまたクマも棲む生き生きとした山塊は、荒れてゆきそうな素朴な愛国心を支えてくれるかけがえのないものとなってきているのではないだろうか。

風評に、「年々クマが小さくなる。獲りすぎだ。」というような事を聞くと、時として人をおびやかす、樹皮をはぐクマではあるが、私は「クマよ生きながらえ給え、死ぬな」と祈り声援したくなる。白山からクマが消える時、猟師はクマを撃てなくて、皆んなさびしくなるであろう。白山を遠くから眺める人も、遠くで古郷の山として心の支えにし誇らしげに語る人も、もう白山ではクマは死に絶えたのだと意識するであろう。視覚でとらえる風景の美よりも、さらに適格に原始性、汚れなき自然を示すのがクマの生存という事実ではないだろうか。

〈自然保護課〉

聞き書き・中宮温泉のむかし

松山利夫

夏、まばゆいばかりの陽光のなかを、ひたひたに汗して歩いたあの縦走コースは、御前峰を中心に南北に連なる分水嶺である。

この嶺々の西斜面に源を発して西流する牛首川は、白山温泉（市ノ瀬）付近ですぐ北に転じる。一方、同じく西斜面を流下してきた尾添川は、白山下近くで牛首川と合して手取川となり、堅牢な流紋岩類を下刻しながら、いっきに鶴来まで流下する。ここには、発達した手取溪谷と河岸段丘とがみられ、段丘面はよく利用がすすんでいて、溪谷の縁辺部にわずかに残された林が、河辺林（ギャレリー・フォレスト）を想起させてくれる。

こうした手取川の本・流域には、数多くの温泉が分布する。この夏、つかれた体をなげ出すようにして一夜をすごしたあのひなびた山の湯のように、これら多くの温泉は、それぞれが登山基地として、またかつては湯治場として利用されてきた。

それゆえに、白山麓のこうした温泉には、ときとして忘れられがちな各種の伝承が今に残され、湯治場であったところのおもかげをみることができる。

中宮道をおりきって、汗によごれた体をいやした中宮温泉での一夜、宿の主人に聞くともなく聞いた温泉にまつわる話を、紹介したい。

温泉の発見 中宮温泉が発見されたいきさつには、2つの伝承が残されている。その1つは、白山麓の村むらでおこなわれていた出作り耕作（山地斜面を焼きはらい、ヒエ・アワなどを栽培する焼畑を営むために、村を遠くはなれて山で生活し、耕作すること）に、山おく深くわけ入っていた村人が、ある日谷間にじっとうずくまる白鳩をみつけた。

不思議に思った村人が白鳩のそばへ寄ってみると、鳩の足もとからこんこんと湯が湧き出していたという。こうして中宮温泉が出作り耕作にきていた村人に発見されたと伝えている。

いま1つの伝承はこうだ。はじめて白山を開いたと伝えられる泰澄大師（7世紀頃）が、うずくまる白鳩を見出し、その導きで温泉を発見したというものである。

出作り耕作者（村人）一白鳩一温泉の発見というモチーフがここにはみられるが、これが白山麓にひろく分布するものかどうか、目下のところは不明である。村人にかえて泰澄大師が発見したとする後者の伝承は、かなり広い分布を示すと想像されるが、これは聖なるものとしての温泉、ないしは聖域での発見を強調したものではないだろうか。

狭い意味での白山麓からやや離れるが、「三州奇談」という本には、山中温泉の発見にまつわる伝承が記載されている。これを要約して紹介すると、「山嶺に僧行基が登ると、紫雲がたなびいて来て、中から80才ぐらにもなるるかという老翁があらわれ、温泉の開発をせよと告げる。行基は温泉を掘り、ここに白山妙理社を祀った。のち、鷹狩りを好む長谷部某という人が、脚をいためた白鷺を鷹にとらせたという。この白鷺は行基の祀った白山妙理社からの使いであった云々」となっている。

ここで注意したいのは、高僧行基であり、「白」い鷺が、中宮温泉の場合と同様、温泉の発見にまつわって伝えられていることである。ここでもやはり、山を聖域とし、白い鳥を神聖視する自然観を認め得る。これはあるいは「鳥占」にも通じるものかもしれない。



中 宮 温 泉

ひなびた山の湯で、現在1軒の国民宿舎と4軒の旅館があり、胃腸の霊泉として知られています。

尾添から中宮の温泉へ 白鳩がみつけ出してくれたという伝承をもつこの温泉は、実は長く尾添の地内にあり、いわば尾添の温泉であった。

かつて、尾添川の左岸地域から西にかけての地域は天領とされ、尾添の村もこれに含まれていた。その当時、田畑はもとより山にいたるまで年貢が課せられていたのであり、温泉も例外ではなかったという。この温泉に課せられた年貢は「湯高^{ユカウ}」と称され、54石と定められていた。ところが、食糧の多くを収量の不安定な焼畑に求めていた当時、尾添の人達にとっては、この年貢は過酷なものであったと思われる。そこで、尾添の村人は「湯高（温泉の年貢）がつくられんというて、テング（天下＝幕府）へ申し出た」ために、温泉はついに尾添から没収されることになった。この話を伝え聞いた中宮（当時は加賀藩領）の村人は、湯高を尾添の人達にかわって納めることを天下に約し、中宮の温泉が誕生したといわれている。

越高と湯株 こうして尾添の温泉は中宮のものになったわけですが、同時に湯高54石も中宮の人達に課されることになったという。このように、尾添から中宮に賦課されることになった湯高（温泉の年貢）が、「越高^{コソカウ}」と中宮の人達によばれている。

しかし、湯高＝越高54石の納入は、中宮でも困難をきわめ、当時の戸数72戸で均等に分

割して納めようとしたといわれる。こうして温泉に関する権利をも72に分割することとなり、ここに72の株、すなわち「湯株」の発生をみることとなった。したがって、湯株は納税の義務と温泉の利用権とが一つになったものであった。

もちろん、湯株の発生以降に戸数が増加し、その結果、株の売買がおこなわれるようになったが、湯株を村外へ売るとは禁止され、温泉の利用権がむやみに拡大することを防いできた。

湯番頭と湯治客 湯株を所有している72戸のうち、温泉を実際に支配するために「湯番頭」がおかれたという。これは原則として1人であったが、ときとして2人のこともあった。

湯番頭になるには、72の湯株を全部（湯番頭が2人のときは36株ずつ）買いあつめることが必要だったという。株を買うことができたのは特定の個人ではなく、株所有者の間で話し合いにより、そのつど決定されていた。

こうして、誕生した湯番頭は20年間これをつとめることになり、この期間を年季と称している。

温泉の支配権をもっていた湯番頭は、中宮の村に居り、温泉に暮らしたわけではなかった。

中宮温泉への湯治客は、かつては米・味噌などの必需品をになって中宮の村を訪れた。村から温泉までの道は険道^{ソバミチ}で、人を何人か雇ってこれらの物資をはこんだといわれる。こんなこともあって、湯治客は必ず湯番頭の家に立ち寄っていた。

湯治をおえての帰りにも、必ず中宮の村に居る湯番頭を尋ねるならわしであったという。これは、「湯銭」といういわば入浴・滞在料金を支払うためであった。

20年の年季の間、湯銭は湯番頭の個人の収入となっていたが、ときには湯銭を1株当たりいくらかに配分したこともあった。

こうした湯番頭の制度は、いまから70年程まえまで、おこなわれてきたということである。

〈研究普及課〉

石川県の自然公園 1

獅子吼・手取県立自然公園

柳 田 亨

自然公園には、自然公園法に基づき指定された「国立公園」「国定公園」と都道府県立自然公園条例に基づき指定された「都道府県立自然公園」がある。これら自然公園では、保護のため各種開発行為が規制される「保護計画」と、利用の方法、施設の配置をきめた「利用計画」とがおこなわれる。

石川県の自然公園には次の7つがある。

石川県の自然公園

自然公園名	種 別	面積ha	指定年月日	関 係 市 町 村
白 登 山	国立公園	25,613	37・11・12	吉野谷、尾口、白峰
能 登 半 島	国定公園	8,700	43・5・1	七尾、羽咋、輪島、珠洲、押水、志賀、富来、鹿島、中島、能登島、門前、穴水、能都内浦
越前加賀海岸	国定公園	1,677	43・5・1	加賀
山中・大日山	県立自然公園	2,576	42・10・1	小松、山中
碁 石 ケ 峰	県立自然公園	2,586	45・6・1	羽咋、鹿島
白山一里野	県立自然公園	1,826	48・9・1	尾口
獅子吼・手取	県立自然公園	6,626	45・10・1	金沢、小松、鶴来、河内、吉野谷、鳥越

獅子吼・手取県立自然公園は、白山に源を発する手取川流域の手取峡谷、河原山地区（580ha）を中心に、獅子吼高原地区（835ha）、不動滝を中心とする地区（272ha）、史跡として著名な鳥越城跡を含む城山とその周辺地区（399ha）、それに近郊レクリエーション地としてすぐれた条件を持つ大日湖、大倉岳、阿手高原地区（4,540ha）の5団地からなっている。

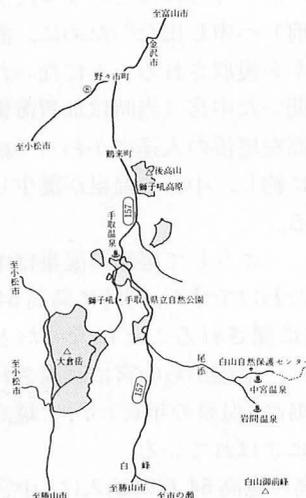
この公園は、各地に散在しており、しかも面積が広いため、急速な進展をみせる乱開発に対する管理の目が行きとどかない面もあるが、去る10月一部改正され、保護規制が一段と強化された石川県立自然公園条例の施行で、今後の保護管理の徹底が望まれる。

一方利用面では、金沢、小松両市に近く、都市部からの日帰りレクリエーション・エリアとして重要な位置にあり、今後交通ルートの整備、湖水・高原の自然探勝利用施設、およびスキー場などの屋外レクリエーション施設を充実し、年間を通じて利用可能な自然公園をめざしたい。

〈自然保護課〉



手 取 峡 谷



◇図書・資料紹介◇

加藤賢三著「白山」

白山をめぐる古い文献が、またひとつ、みつかった。明治44年に出版されたものである。著者は旧金沢二中の教諭で、幾度かの白山登山と山麓の見聞をおこない、当時の各分野での研究や統計資料も広く集めてまとめてあり、ナチュラル・ヒストリー（博物学）の実際を教えてくれるものがある。

白山について科学的資料をここまでまとめたものとしては最も古いものであろう。内容は地形・地質・動植物から歴史、登山案内に至るまで広い範囲にわたり、半世紀以上前によくここまで調べたものだと言わねばならぬ、白山は古くから自然研究がよく進んでいたところだとあらためて感心せざるをえない。

自然の項では、地質断面図、植物の解説、気象の記録など絵や表を含めて大変正確な記録がされている。特に手取統の化石を中心とした地質の解説、高山植物の分布状況などは注目に値する。登山案内では白山への道ぞいの山村の暮らしがよくまとめられていて、当時の山麓の生活をしのぶのによい。また現在とは登山道もかなり異なっていたようで、くわしい地図と解説で当時の登山利用の状況が具視されている。

今ではこの本の入手はもちろん、所在をつかむこともむづかしからう。その後研究は進み、白山についてまとめたものや、ガイドブックも多く出版されているが、このような本が出ていたということで紹介した。（水野昭憲）

〈B6版 210頁 有聲館 明治44年刊〉

たより

冬季のセンター利用について

蛇谷のセンターでは、展示業務を中心に、自然観察園や白山室平などでの自然観察や、自然探勝指導など、不十分ながらおこなってきました。

冬季閉館後も引続き業務をおこなっておりますことは、前号でも紹介いたしました。そこで、皆様にも御利用いただけますように、その事業の一部をお知らせします。

日常は、夏季にセンターを訪れていただいた方々の御意見の整理や検討、夏の間の調査の整理や、来春の2月末に発行を予定しております「研究紀要」の作製などにおわれています。ですが夏の間と同様、自然保護に関する講演会や映画会、諸種の資料をもちよっての討論会などもおこないます。御希望があれば御連絡下さい。映写や講演などは、御申し越しに依って課員が出掛けて行くこともいたします。

現在のところ、数は大変少ないのですが、映画・スライド等、センターで所持しているもののリストを下にあげておきます。御参考にしていただければと思います。

○映画フィルム（16mm）		山の生きものたち	（15分）
自然のつりあいと保護	（20分）	美しい国土 その生いたち	（47分）
日本の国立公園		サルと糸さん	（27分）
第一部 九州の自然	（15分）		
第二部 本州の海	（15分）	○スライド	
第三部 本州の山	（25分）	日本の野鳥	（42分）
北海道の自然	（30分）		

表紙解説

白山のクロユリ

ユリ科 (Liliaceae) バイモ属 (Fritillaria)

クロユリ (Fritillaria camtschatcensis)

古くは、『佐々成政が、その妾の早百合と小姓との仲を疑い、二人、及び早百合の一族を惨殺した時、「立山に黒百合が咲けば、佐々の家は滅亡しよう」と、早百合は憤怒の形相すさまじく叫んだが、後に成政が淀君に白山の黒百合を献じたことから北政所の怒りをかい、ついに身も家も滅ぼしてしまった。』との伝説もある程、昔から人々の心をひく花であるが、特にめずらしい花という訳ではなく、北は北海道の平地から南は白山まで、広く分布している。

白山の黒百合は、生育が旺盛で、他の高山に比べて数が多く、又他の山のものが一茎に一花ないし二花程度しか花をつけないのに、白山のものは二〜三花、まれに四花をつけることがあり、更に他の高山のものより草高が高く30〜40cmになるものもある。

石川県の県花にもなっている暗黒紫色のこの花は、白山の弥陀ヶ原、室平、南竜馬場に群生し、多くの登山者の目を楽しませ、恋の花とまで歌われ、山乙女の胸中をくすぐり、可憐な、そして高貴な花として、高山のお花畑の女王として君臨しているが、その名声と裏腹に、毒々しいまでに黒いこの花の強烈な悪臭は、百年の恋をもさめさせるものがある。

〈四手井英一〉

◇ 編集後記 ◇

雪の山里からの第4号です。

11月18日がこの辺りの初雪でした。歳の瀬の迫った今では、軒下に身の丈程も積っています。さすがに豪雪地帯であることです。雪国での冬がはじめての編集子は、好奇心とは裏腹に不安がること頻です。

センターは、白山国立公園の他に加賀地方にある県立自然公園をも管理しております。自然保護課の柳田技師に、今号より各自然公園をめぐる、保護管理の計画や利用案内を連載していただくことになりました。

はくさん 第1巻 第4号

発行日 1973年12月20日

発行所 石川県白山自然保護センター

石川県吉野谷村市原

印刷所 株式会社 橋本確文堂